

平成27年度 第1回FD研究会

# 工学教育のあり方を問う

## 超高齢社会における 工学技術の新たな展開

本シンポジウムでは、「ユーザー参加型デザイン(ユーザーがコンセプト設計の段階から開発に関与することで大きな制約条件の見落としを防ぐ)」という考え方を提唱すると共に実際にそうした観点から福祉機器開発に取り組んでいる硯川潤氏と、「プロデュース・デザイン(今あるものの価値を可視化させることで、それらを新たに活性化させる)」という考え方をベースに精力的に街づくりに取り組んでいる伊藤孝紀氏から講演いただき、その後は、会場の皆様からの質疑等により積極的に意見交換を行うことで、「超高齢社会における工学技術」に関する視点を深めて行きます。

日時 **7月24日(金)**  
15:00~16:30

会場 **名古屋工業大学 4号館1階ホール**

### プログラム

15:00 ● **開会挨拶** 名古屋工業大学 工学教育総合センター長・教授  
**森 秀樹**

15:05 ● **シンポジウム**

講師

国立障害者リハビリテーションセンター研究所  
福祉機器開発部・福祉機器開発室長  
**硯川 潤氏**  
名古屋工業大学 工学部建築・デザイン工学科・准教授  
**伊藤孝紀氏**

司会

名古屋工業大学 工学教育総合センター・教授  
**大貫 徹**

**入場  
無料**

問い合わせ先

**名古屋工業大学**

TEL : 052-735-5066

E-mail : gakumu-tan@adm.nitech.ac.jp

交通アクセス

JR中央線 鶴舞駅、  
地下鉄鶴舞線 鶴舞駅 東へ徒歩約7分

# 工学教育のあり方を問う

## 趣旨

日本は、1960年代以降、人口の急激な増加に伴い、まずはモノを作れ、宅地を造成しろ、家を作れ、交通を整備しろとなり、その結果が、ご存知の「大量生産大量消費」となりました。もちろんこれによって日本は世界有数の豊かな国となり、寿命も大きく伸びました。ところが今、逆の流れがはじまりました。労働人口の減少、高齢者人口の増加ということです。こうなると、従来とは大きく異なる発想が必要不可欠となります。工学においても例外ではありません。その際、ヒントになるのが、ひとつに、福祉機器の開発現場においてすでに取り入れられている「ユーザーがコンセプト設計の段階から開発に関与することで大きな制約条件の見落としを防ぐ（ユーザー参加型デザイン）」という考え方であり、ふたつに、「今あるものの価値を可視化させることで、それらを新たに活性化させる（プロデュース・デザイン）」という考え方です。もちろんこれら以外にもヒントとなる考え方は多くあるかと思いますが、今回はこの二つを中心に議論を展開したいと思います。

「既存の工学の枠組みにとらわれることなく、工学が本来有する無限の可能性を信じ、新たな価値の創造に挑戦する」とは名古屋工業大学憲章の一節ですが、この言葉に則り、この機会に「超高齢社会における工学技術の新たな展開」について、さらにそこから、工学技術の開発を実際に担う人材を育成する場である本学の工学教育のあり方についても、改めて熟考する機会を設けることで、皆さんとともに真剣に考えたいと思っています。

今回のシンポジウムでは、支援機器の開発にユーザーの参加を積極的に取り入れ、機器と人との適合を実現する「適合デザイン」の提唱者であると同時にそうした観点からの機器開発に熱心に取り組んでいる国立障害者リハビリテーションセンター研究所の硯川潤氏と、「プロデュース・デザイン」という考え方をベースにきわめて精力的に街づくりに取り組んでいる本学の建築・デザイン工学科の伊藤孝紀准教授のお二人に、まず、それぞれのお考えを提供していただき、その後は、司会者を交えて、積極的に意見交換を行うことで、「超高齢社会における工学技術」に関する視点を深めて行きたいと考えております。さらに会場にご参加の皆さんからも質問や意見等を頂戴したいと思っております。そうすることで、今回のシンポジウムをさらに実りあるものにしたいと願っております。

また今回のシンポジウムは、工学教育に限らず、広く「超高齢社会におけるさまざまな課題にどう対処すべきか」ということにご関心のある企業関係者、行政関係者あるいは一般の皆様にとっても有意義なものではないかと自負しております。ぜひともご参加願います。

## 講師紹介

### ■ 硯川 潤 氏

東京大学工学部産業機械工学科、東京大学大学院工学系研究科産業機械工学専攻修士課程を修了後、東京大学大学院情報理工学系研究科知能機械情報学専攻博士課程に進学し、その在学中に事故で四肢麻痺の障害者となる。受傷後に博士号（情報理工学）を取得。現在は国立障害者リハビリテーションセンター研究所・福祉機器開発部の福祉機器開発室長として、先端的福祉機器の開発・評価や、情報通信技術を活用した福祉機器の臨床評価支援手法の開発などに従事。自身も電動車椅子ユーザーであり、研究者・当事者双方の立場から障害者の自立支援に取り組んでいる。

### ■ 伊藤孝紀 氏

名城大学理工学部建築学科、沖縄県立芸術大学大学院修士課程を修了後、北山創造研究所を経て名古屋市立大学大学院博士後期課程にて博士号（芸術工学）を取得。現在は本学の建築・デザイン工学科准教授。建築、インテリア、家具のデザインやデザインを活かしたブランド戦略を実践。行政・企業・市民が連携する街づくりに精力的に取り組んでいる。

代表的な著作に『まちを演出する 仕掛けとしてのデザイン』（鹿島出版会、2013年）。主な受賞歴に2012年「日本デザイン学会研究奨励賞」、2013年「グッドデザイン賞」、2014年「日本建築学会作品選集新人賞」がある。

